

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

テムズ川の看板が教えてくれるもの

著者	石川 郁二
出版者	法政大学多摩論集編集委員会
雑誌名	法政大学多摩論集
巻	33
ページ	25-51
発行年	2017-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/13227

法政大学「多摩論集」第33号
2017年3月

テムズ川の看板が教えてくれるもの

石 川 郁 二

テムズ川の看板が教えてくれるもの

石 川 郁 二

1. はじめに

テムズ川沿いに設置されているテムズ・パスを歩いていると、多くの看板や掲示が目につく。それらには、テムズ・パスやテムズ川に関する事、そしてテムズ川流域に関する事、テムズ川に生息している動物や植物に関する事など、様々な情報が書かれ、歩いている人は今まで知らなかった情報に接することで、看板の情報を読んでいくのが楽しくなる。

テムズ川は、イングランド南西部にあるグロスターシャー州のコッツウォールド丘陵を水源とし、ロンドンを通して北海に注ぐ大きな川である。テムズ川はその規模が大きいというだけではなく、日常生活においても大きな役割を担っており、文学作品にもよく表現されている川である。

テムズ川は、その流域に住む人間の暮らしを支えているばかりではなく、そこに生息している動物や植物にとっても、なくてはならない川なのである。そのようなテムズ川は、時代によって、その性格を変え、その役割も変わってきている。テムズ川の上流で産業が発達するとその製品を運ぶ重要なルートになる。他国との戦いになると多くの兵士がテムズ川を船で運ばれ、テムズ川から大きな軍艦が出航する。観光に力を入れる時代になると観光用のボートや川岸の整備、観光客を受け入れる施設などの事業がテムズ川の周りに興り、多くの観光客を集めるようになる。つまり、テムズ川は各時代を反映して変わってきている、と言っても過言ではないのである。

看板や掲示物の情報は事実の積み重ねが主であるのだが、その情報から見えてくるものがある。

この小論は、テムズ・パス沿いにある看板に書かれた情報の中から、何を読み

取ることができるのか、そしてそれらが我々に教えてくれるものは何なのかを探ってみるものである。

2. 変わりゆくイギリスとテムズ川の歴史

テムズ・バリアーというテムズ川に造られた洪水防止用防壁の横に、テムズ・パスの基点がある。ロンドンの方から水源まで歩くとすると、そこが「基点」になるのだが、水源の方から歩くとすると「終着点」になる所である。そのテムズ・バリアーからロンドンの中心地のほうに歩きだすと、テムズ・パスは工場群の中に入っていく。そしてグリニッジである。ミレニアム・ドームという大きなドームもある。そこを通っているテムズ・パスに設置されている看板は、横に長く、何枚も板を貼り合わせてあるもので、テムズ川を中心にしたイギリスの歴史が書かれている¹⁾。

その看板はグリニッジにあるものなので、グリニッジに関する記述が多くなっているのは仕方がないことではあるが、イギリスの歴史が大まかに書かれている。紀元前110,000年の記述から始まり、西暦2000年までで終わっている。

紀元前110,000—13,000年は、ヨーロッパから西アジアにかけて住んでいたとされるネアンデルタール人についての記述である。

テムズ・パスはイギリス人の大人でも子供でも、外国からの観光客でも通る歩く道である。誰でもそこを通ることができ、通る人はそこにある看板を読むであろう。だから、その記述は、専門の歴史書のように詳細に亘って書かれているわけではなく、大雑把なものである。しかし、イギリスのことや、テムズ川のこととは大体分かるようになっている。

どのような歴史が書かれているのであろうか。看板に書かれたものをすべて網羅して載せているわけではないが、これから、その記述を見てみたいと思う。

紀元前12,000年には、現在のロンドンのトラファルガー広場や、おそらくグリニッジのテムズ河岸でも、象が歩き回っていたようだ。

紀元前8000年には、イングランドとヨーロッパが、帯状の陸地である陸橋でまだ結ばれていたのである。当時は、テムズ川とライン川が合流し、北海に流れていた。そして、ブリテン島は大陸から歩いてくる移住者集団によって入植されることになるのである。

理由はまだ分からないが海水面が上がり、極地を覆っていた氷冠は溶け始める。海が上昇する原因となり、現在のイギリス海峡が海水で満ちた。

紀元前6000年頃に、イングランドが島になったのである。

紀元前4000年頃には、イングランドに移住した人たちがテムズ川流域の住民になり、テムズ川によって拡散し、拡大していった。その事は、テムズ川の水辺地帯で発見された「ピーター」と呼ばれる、木製の「何かを打つ道具」で分かるのである。その遺物は原形を保って残っていた。それは4000年以上前のもので、おそらく大きな魚を殴るために使用されていたものと考えられている。

紀元前2200—600年になると、テムズ川のすぐそばの地域で、人口が拡大し、農耕が増えた。そして敵に対する防備が増強したのである。

紀元前約1600年、テムズ川にかかる最初の橋が建造された。場所は、現代のロンドンのテムズ川南岸地域のボックスホールの近くである。

紀元前50年—西暦50年、ローマ人の侵攻がイングランドに多くの新しい陶器様式をもたらした。そして、紀元前50年頃には、有名なバターシー盾のような装飾的な甲冑が、危機の時の助けを神々に懇願するものとして、テムズ川に捧げられたかもしれない。

紀元前から西暦になる頃のテムズ川の河口は750メートルの幅があった。今のロンドンの中央部を流れるテムズ川の川幅の約3倍の幅があったようだ。

紀元前の記述は、この部分には、以上のようなものしかない。この後は西暦元年以降になる。

西暦100年頃に、テムズ川を横切る最初のロンドン・ブリッジがローマ人によって建造された。その橋は木材で造られており、場所は、現在のロンドン・ブリッジの少し下流であつたらしい。

ローマ人が作る「ガルム」と呼ばれる魚料理の作り方が看板に記載されているが、簡略な記述である。

今のグリニッジ公園の森の中に聖堂が建てられた。ここで発見された象牙の破片は、この時代の船荷がアフリカのような遠くからテムズ川に送られてきていたことを示している。

180—200年、大昔のロンドンの汚物だめはこの時代から始まったようだ。テムズ川の河口から淡水魚の骨が多く出たが、それはローマ人が魚を沢山食べたということを示している。

240—360年、新しい1.75キロメートルの河岸の壁がロンドンに造られ、北の移住者を取り囲んだ。その後、370年に、大きな河岸の壁が、サクソン人の略奪者たちからロンドンを守るために造られた。彼らは海を渡ってやってきたのである。

300年頃のテムズ川のそばの森林についての記述が載っている。森林は造船のために管理されていた。真っ直ぐな木材はマスト用になり、木が垂直に成長するように木々を接近させて植えることで生じる。湾曲した木材は船体用になり、木々を遠く離して植えることで発育が促されると書いてある。

このように、簡略ではあるが、樹木の植え方の記述まで書かれているのである。テムズ・パスを歩く人たちにとっては、あまり専門的にならず、この程度の記述で、普段分らない知識が知れるのである。

300—400年に、海水面が急激に上昇し始めた。

テムズ川の看板が教えてくれるもの

500年、テムズ川流域への移住は、ローマ帝国の没落以降減少した。しかし漁業や産業はテムズ川流域で依然続き、侵略者に対してのロンドンの都市防備は補強された。

テムズ川の河口は多くの場所で750メートルの幅があり、それは現在の3倍の幅であった。現在ウェストミンスターが建っているところは湿地帯であった。

600年、テムズ川の水面は上昇し続けていた

600年頃のテムズ川は、生命に溢れていた。そしてアングロサクソン人の移住者は、魚を捕るためのワナを現代のチェルシーの近くに造ったのだが、そのワナは100メートル位あるものだった。

800年代には、バイキングの襲撃艦隊が襲ってきて、テムズ川流域に住んでいた人たちに恐怖をもたらした。アルフレッド大王は、ロンドンの昔のローマ人の壁の内側に、繁栄している町を戻し、安全な場所を造った。

871年、記録では、アルフレッド大王は父親のエサルフッドからグリニッジを相続し、それを娘のエルストルーディスの結婚の時に娘に与えたとなっている。しかし、この記録書は、現在、文書偽造の可能性があると考えられている。

このように、明確に事実と判明していないものも、載せてあるのだ。史実に基づいた正確な歴史だけが記載されているとは言えないが、テムズ・パスを歩いている人たちにとっては、その記述に「文書偽造の可能性」とあることで、格式張ったものではないということが分かるのである。

889年、ロンドンの最初の埠頭の場所が記録されており、それはクイーンヒザと呼ばれる埠頭地区にあった。

964年、エドガー王は自分自身をブリテン皇帝と呼ばせるのが好きであった。彼は、グリニッジ半島を含むルーイシャムの莊園を、ゲント（現在のベルギー）の聖ペトロ大修道院に授けた。

994年に、最初のロンドン・ブリッジが建造された。テムズ川の川底の中に頑丈な木材の杭が打ち込まれ、その上に、太い樹木の厚板が置かれていた。

1000—1100年、中世のロンドンでは、満潮が現代の干潮と同じレベルであった。1012年、デンマークのバイキングがテムズ川にやってきて、グリニッジに錨を降ろした。彼らはカンタベリーの大主教アルフェジーを誘拐し、彼をグリニッジに引っ張ってきて、結局、彼を殺害した。バイキングの指揮官サーキル（不本意だった殺害の証人）はその事にあまりにも深く悩んでしまい、味方する側を変え、イギリス王エセルレッドに仕えることを申し出た。1081年に、ウィリアム征服王はグリニッジを聖ペトロ大修道院の所有地だと認めた。

1125年、ヘンリー一世は、オックスフォードまで御座船に乗ってテムズ川を上った。オックスフォードで王はサケを食べたのである。

この記述で、ロンドンより上流にあるオックスフォードでサケが捕れたことが分かる。当時のテムズ川はサケが遡上するほどきれいな川であった。

1197年に、テムズ川の管理委員会がロンドン市の市自治体になった。

1209年、最初の石の橋がテムズ川に掛けられた。その設計には欠点があった。なぜなら、その橋のアーチは潮の流れを考慮していなかった。

1269年、大寒波の年であった。寒波のためテムズ川の一部が氷結した。生活必需品の供給は、船が川を上げれないので、Kent州のサンドイッチから陸地で運んだ。

1300年頃、木製の土留め壁の建設によってテムズ川の岸の補強をした。

1400年頃のことだが、巡礼の旅をしている人々が、しばしばテムズ川に金属のバッジを投げ入れた。おそらく彼らは自分たちの旅の幸運を祈るしるしとし

て、そのようなことを行ったのであろう。

1414—15年、ヘンリー五世は公式に修道院の土地を没収し、グリニッジの荘園を造った。

1430年、グリニッジの荘園は、亡くなったヘンリー五世の一番年下の弟であるグロスター公ハンフリーの所有になった。

1447年に、グロスター公ハンフリーが拘禁中に亡くなった。それが殺害かどうかは確証でなかった。グリニッジの荘園は国王に戻り、その後、王家の宮殿プレイサンス荘園になった。

1491年、ヘンリー八世がグリニッジのプラセンシア宮殿で生まれた。

1500年頃、グリニッジは君主の所有となり、王の宮殿や邸宅がテムズ川の土手沿いに建てられた。

1500年代に、ロンドンの人口は50,000人から200,000人に爆発的に拡大したが、グリニッジ半島は未開発の沼地と牧草地のままであった。

テムズ川は川幅が広く、ゆっくりと流れていた。テムズ川流域のほとんどに湿地帯があった。しかし、河岸の地所は価値が高くなり、川の中に張り出す建物が以前にもまして一般的になった。木造の川の壁が、より永続する石の構造物に取って代わられた。川の中に張り出す建物が多くなり、その不法占拠物件のために、川の水路が狭くなり続けた。

先のとがった靴が流行の最先端になった、多くの靴の残骸がテムズ川の河床で発見された。靴のつま先は、形を保つために、コケを突っ込んだ。つまずいて転倒する人がかなり多かった。その原因はつま先が尖っていることだったので、そのスタイルは禁止された。

人々の飲み水は、家から家に、水運搬人によってバケツでロンドン中に配られた。

テムズ川の水辺地帯で発見された多くの昔の管の集まりで、各年代のパブやフェリー船着き場の場所が明らかになった。

ヘンリー八世がロンドンの河岸にブライドウェル宮殿を建てた。しかし、それはテムズ川に注ぐ、汚染で悪名高い悪臭を放つフリート川にあまりにも近かった。その結果、その宮殿はその後、貧民収容施設に改装された。

1500—4年、ヘンリー七世がテムズ川を見渡せるグリニッジにプラセンシア宮殿を建てた。彼はロンドンと宮殿を王室の御座船で通った。

1509年に、ヘンリー八世が父親を継承し、グリニッジのプラセンシア宮殿でアラゴンのキャサリンと結婚した。

1512—13年、ヘンリー八世はグリニッジ半島の近くにウリッジ&デットフォード造船所を創設した。

1533年、ヘンリー八世とアン・ブーリンの娘エリザベス（女王）がグリニッジの王の宮殿であるプラセンシア宮殿で生まれた。

1550年に、ポッターズ・フェリーと呼ばれる、ドッグス島からグリニッジまでのフェリー賃貸契約が許された。

1564年、大厳寒がテムズ川を凍らせた。人々はロンドン・ブリッジとウェストミンスターの間の水の上を歩き、そして「まるで乾いた土地の上だったかのように大胆にフットボールをする人たちもいた。」

1577年に、フランシス・ドレーク公が、グリニッジの近くのデットフォードからテムズ川を出航し、世界周航を始めた。

ドレーク公が戻ってくると、エリザベス一世はフランシス・ドレークにナイト爵を授けた。そして彼の船ゴールデン・ハインド号をデットフォード入江に戻すように命じた。ハインド号の遺物はおそらく今日でも、現代のビルの下に埋められ、そこに残っているだろう。

1581年頃、グリニッジで、ウォルター・ローリー卿が、エリザベス女王のために、水たまりに自分の上着を投げかけてその上を歩くようにして、水に濡れるのを避けさせた、という言い伝えがある。

1585年、エリザベス女王は「グリニッジから、急いで」スコットランド女王メアリーの死刑執行令状に署名した。2年後、メアリーは監禁され、死刑にされた。

1588年、女王エリザベス一世が英国海軍を増強し、女王の艦隊が、カトリック教会のスペインと戦い、スペインの無敵艦隊アルマダを破った。

1600年代、ロンドンでは真水がとても貴重であった。市内の公の蛇口は20未満であり、それらに武器を近づけるのは禁止されていた。ロンドン市では下

水は住居のすぐ下の穴に捨てられた。

グリニッジのプラセンシア宮殿での新しい「国王の存在」が、ロンドンや地元コミュニティの発展を促すのに役立った。

1610—13年、ヒュウ・ミドゥルトンが「新しい川」を建設した。その運河は、38マイル離れたハートフォードシャーの水源からロンドンまで真水を流した。ロンドンの町の中では、水は、中が空のニレの木の幹から作られている管を通して、年4回の使用料を払っている顧客がポンプで水を汲み出すことができるようにした。

1613年に、トリニティ病院がグリニッジの河岸に設立された。その病院は現在でもまだある。そこに建てられた川の壁は、今でもテムズ川沿いに残っている最古のものである。

1616年、グリニッジで、女王の邸宅の建設が始まった。その邸宅はおそらく狩りや軍事パレードを見る特別観覧席として設計されていたのだろう。

1626年に、誰もが驚いたことには、竜巻がテムズ川を襲った。

1629年、チャールズ一世の王妃、ヘンリエッタ・マリアがグリニッジで悲劇的な流産をした。王妃を励ますために、グリニッジのクイーンズ・ハウスが再建された。彼女は将来のチャールズ二世を1年後に生んだ。

1642—9年、清教徒革命が勃発した。グリニッジのクイーンズ・ハウスが公式の議員官舎になった。ハウスの財宝が奪われた。すぐ近くのプラセンシア宮殿がビスケット工場になった。

1658年、大きな鯨がグリニッジの近くの浜に引き上げられ、多くの群衆を引きつけた。その鯨は、体長58フィートで大きなしっぽがあり、口がとて大きく、人がその中に立っていることができると伝えられた。

1665年、莫大な量の石炭がグリニッジで配られ、大疫病の荒廃を克服するためにロンドン中の大きな公の灯の燃料となった。

1666年に、ロンドン大火が起こった。4日間でロンドンの五分の四を破壊した²⁾。その後、テムズ川沿いの「エンバンクメント」の建造が提案された。

1675—6年、グリニッジ天文台が建設された。その場所は空気のきれいな所で、ロンドンの中心部の煙や煙霧からは離れていた。

1694年、非常に多くの船乗りが戦争で負傷したため、ウィリアム王とメアリー

王女がグリニッジ病院の設立を決めた。

1696年、クリストファー・レンがグリニッジ病院の敷地の地取りをし、建設が始まった。

1700年代、テムズ川は主要な輸送手段となった。そして、海運業が繁盛した。大疫病とロンドン大火災の後、大きなビル計画が、さらなる不法占拠物件（川の中にせり出して建てる）の原因となり、水路が劇的に狭くなった。

グリニッジは依然、君主政体にとって人気のある場所で、グリニッジ病院やクイーンズ・ハウスの建設で発展が続いた。

1700年から現代までのビール瓶の変化が、現代の川の水辺地帯で見つかる瓶の残骸から、分かった。

1713年、テムズ川のフェリーは1回に8人以上乗せてはいけないという条例が新たに制定された。

1775年、白鳥の数がテムズ川で減少していた。白鳥の卵を破壊したり取ったりする人に関する情報を与えてくれた人には、誰にでも5ポンドの報奨金が与えられた。

1779年に、グリニッジ病院で火事が起こった。テムズ川から人が繋がって、水をバケツにくんで手渡しで運んだ。

1775年、漁夫のポーコックが、長さ8フィート、重さ221ポンドのチョウザメを捕まえた。そして彼はプレゼントとして市長にそれを贈った。

1800年代、水洗トイレが導入され、糞壺（ふんつぼ）トイレは廃止された。この世紀の中頃まで、すべての汚水は直接テムズ川に排水され、テムズ川の野生生物のすべてが絶滅の危機に直面した。

産業は劇的な成長を経験し、1880年代後半にはグリニッジ半島の人口は500人から8,000人に爆発的に増加した。河岸区域は工場を受け入れ始めた。

ヴィクトリア・エンバンクメントの建造で、テムズ川に37エーカー張り出した。

テムズ洪水法は川の壁の引き上げとエンバンクメントの強化につながった。

1805年、英雄のネルソン卿の遺体が、グリニッジ病院で最後のお別れで一般人

に公開されるためにテムズ川を運ばれた。哀悼者の数は20,000人を超え、60,000人は入場を断った。

1830年、中世に建造されたロンドン・ブリッジが取り壊され、新しく再建された。新しいロンドン・ブリッジは、アーチを通してより簡単に通行できるようになった。

1832年、うわさによると、一人の男がグリニッジ病院近くのテムズ川の水中に20分間歩いたということだ。

1833年に、ロンドン・ブリッジの上流で捕まえられた最後のサケが記録された。その後、150年後まで、サケの記録はなかった。

時報球がグリニッジ天文台に設備された。

1836—8年、ロンドンとグリニッジ間の鉄道が開通した。これは、世界で最初の郊外鉄道であった。

1845—6年、産業の事故がグリニッジ半島であまりにも一般的になった。火事がロープ工場で起こり、その工場が没落した。ある化学工場で、3人の工場労働者が硫化水素ガスで呼吸困難になった。

1849年、すべての魚がテムズ川のロンドン水域から消えた。

致命的なコレラ疫病がロンドンで突然発生した。コレラは汚水によって運ばれた。

1858年は「大悪臭の年」だった。熱波のために、汚染したテムズ川からとても強い悪臭が発した。テムズ川が原因になっているので、消毒薬の中に付けられたシートが国会議事堂の窓に吊り下げられた。コレラや他の命にかかわる病気は、悪臭が原因と広く信じられていたのだ。それは立法府の議員にパニックを起こさせ、川をきれいにする行動を非常に素早く取らせることになった。

1859年、ジョセフ・バザルジェットが、ロンドンのために下水設備制度を開発した。ヴィクトリア、アルバートそしてチェルシーのエンバンクメントもバザルジェットによって設計された。

1860年代、テムズ川の河口に近い地域は、造船業が集まっている世界で最も大きな地域であった。市場向け農園はたった一つだけグリニッジ半島に残ってはいたが、テムズ川の漁業共同体は無くなった。

1861年、トーマス・クラッパがチェルシーに店を開き、水洗便所を売った。彼の広告スローガンは「一回一回の引きに確かな流れ」。

1866年、最初の大西洋を横断するケーブルが、3回の失敗の後、アメリカとヨーロッパ間に敷設された。長さ2,730マイルのケーブルはグリニッジで製造され、グレート・イースタン社によって敷設された。

コレラの流行で数千人がロンドンで亡くなった。人が亡くなった地域は、新しい下水設備がまだ完全に出ていない地域のみであった。1870年代までには、水で菌が伝染する病気は無くなった。

1878年、テムズの観光蒸気船プリンセス・アリス号が下水の落ち口近くで沈没した。ある調査によると、そこは水の汚染状態がひどかったので死者が増えたとのことだった。

1880年代 ジョージ・ライヴセイがグリニッジの南都市ガス工場の会長になった。

1884年、グリニッジが世界の時間と時間帯の本初子午線になることが投票で決定された。

1890年に、ブラックウォール・トンネルが建造された。グリニッジ半島で北と南の川岸がつながった。

1892年、ガスタンクNo.2がグリニッジ半島に建てられた。それは世界で一番大きなもので、発展する英国産業を表すものとして有名になった。

1900年代、新しい下水管が、依然続く公害問題のほんの一部を解決した。魚の種がテムズ川のロンドン区域では生き残っていなかった。グリニッジ半島の工場からの汚染物質がしばしば未処理のまま川の中へ直接捨てられていた。

パワーハウスと呼ばれる最初の発電所が、ブラックウォール・ポイントに建設された。石炭を燃料とし、蒸気機関を使って電力を生み出した。

バザルジェットのロンドンの下水設備は、水が媒介する病気の流行を終わらせた。

1902年に、北グリニッジからドッグス島へ、テムズ川の下を通るトンネルが完成した。労働者が西インド・ドックスへ歩いて行けるようになった。

1908年、テムズ川で建造された最後の戦艦「サンダラー号」がグリニッジ近くで進水した。

テムズ川の看板が教えてくれるもの

1914—1918年、第一次世界大戦中に、ロンドンの人口は増え、産業は拡大し続けた。それで、テムズ川の水質は再び悪くなった。

1920年代、テムズ川は輸送で大いに利用され、200隻のフェリーが川で運航していた。

1928年に、中央ロンドンが洪水になり、14名が溺死した。

1930—35年、テムズ川の土手が、将来の洪水を防ぐために高くなった。

1939—1945年、第二次世界大戦で、爆弾がロンドン中の下水管と下水処理場に被害を与えた。それで公害問題が増えた。細菌分解性でない洗剤の使用増加が事態を悪くした。

産業の中心地であるグリニッジ半島と近くのドックランドは、第二次世界大戦の間、特に攻撃目標とされた。150以上の爆弾がグリニッジガス製造所に落ちた。

1940年、タワー・ビーチが中央ロンドンに設備され、汚染された川の水にもかかわらず、夏の集客力のある人気の場所になった。

1950年代、テムズ川は実質的に死んだ。汚水流出、産業排出物、発電所やガス製造所からの熱公害、そして細菌分解性でない洗剤が原因となっていた。

1951年、テムズ調査委員会は、テムズの下水処理場が改善されなければならないこと、そして移動する魚が川を泳いで通過することができるように、テムズ川の水質を上げるべきだという結論を下した。

1953年、イースト・コーストとテムズ河口域は、300人もの死者の数が出た悲惨な洪水を経験した。ロンドンを将来の洪水からどのように守るかという討論が激しさを増した。

次の3つの提案がされた。

1. 首都をどこかに移す。
2. 川と市を完全に分けるために現在ある川の壁を3メートルさらに高くする。
3. 川の流れを管理するために下流にバリアーを造る。

どこの国でも、首都が大きくなりすぎると、公害が発生し、川が汚染される。そして、それに対しての対処方法を考えなくてはならなくなる。

1960年代と70年代に、下水処理工場の改善、産業排出物の排水路を川から遠くに移す、そして生物分解性の洗剤の導入が行われ、徐々にテムズ川がきれいになっていった。

1970年頃、南メトロポリタンガス製造所が閉鎖した。石炭から製造されるガスは新しいライバルの天然ガスに取って代わられた。

1971—72年、テムズ・バリアと洪水防止法が、テムズ・バリア建造への道を開いた。暫定的土手持ち上げが当座しのぎの方法として行われた。

1974年に、サケがテムズ川に戻ってきた。

テムズ・バリアの建造が始まった。テムズ・バリアは1983年に完成した。幅520メートルに及び、悲惨な洪水の脅威からロンドンを防ぐために造られた。

1979年、テムズ川サケ再生計画が始まった。若い魚を導き入れ、帰ってくるサケが産卵場所に到着できるように堰（せき）での通り道を造った。

1989年、テムズ「飲用噴水」船が導入され、魚の個体数を増やすのを助けるために、一日に30トンの酸素を直接テムズ川の中に注入した。

1993年、産卵のために遡上するサケが338匹再び戻ってきたのを記録。

1996—9年、テムズ川のすべての水辺地帯の考古学的調査が初めて着手された³⁾。

人工遺物の分布範囲が有史以前の時代にさかのぼる年代の特定に貢献した。

1997年、イギリス共同事業がグリニッジ半島の敷地を取得し、大きなスケールでの浄化と開発を始めた。

1997年に、ミレニアム・ドームの建設が始まった。

1998—2000年、グリニッジ半島がさまざまな面で大きな開発をし続け、ミレニアム・ヴィレッジが始まったことでグリニッジにまったく新しいコミュニティの土台ができた。

2000年、ミレニアム・ドームがグリニッジ半島で開業した。

ミレニアム・ドームは我が国で最も大きな雑排水リサイクル計画を持っている。

2000年代、汚水処理に関する浄化活動と厳しい規則により、数百の種がテムズ川に戻って来られるようになった。鋼鉄板の杭は、環境に優しい段丘へと道を譲り、そして土壌がより自然な方法でうまく水を処理した。

テムズ川の看板が教えてくれるもの

サイクリング道路やフットパスのネットワークが、グリニッジ半島全体で広がった。ミレニアム・ドームとチャールトン駅との間に新しい通路ができた。

以上の事は、看板に書かれている記述の大部分であるが、すべてではない。看板には、これら以外にも、作家たちの作品の一部が書かれていたり、簡略な絵などが描かれている。それぞれの年代で起きた出来事に関係のある事に触れられている箇所を抜粋したり、絵にしたりしているのである。

ここまで読んでくると、様々な年代の大きな出来事が書かれているのが分かる。王室関係の項目が多いのはイギリス的である。そして、それが地元のグリニッジと結びついている記事も多い。

テムズ川に関する記述が中心なので、水に関しての文章も多い。上水道や下水道は、大都市として解決しなければならない大きな問題であろう。水洗トイレの記事があるのも、それらがすべてテムズ川に流れ込んでいく水であるからだ。そして、大疫病のことも書いてあるが、これもロンドンにとっては重要な項目である。ロンドン大火災はよく知られていることで、悲惨な状況であったことも、忘れられることはない。

歴史を大雑把にでも見てくると、テムズ川は、流域に住んでいる人たちにとって、とても重要な役割を果たしているのが分かるのである。1950年代にテムズ川が実質的に死んでしまったということは、イギリス人にとっては大変なことであった。しかし、彼らはそこから学んだのである。下水処理の方法を考え、汚水がテムズ川にそのまま流れることがないように改善したり、産業廃棄物の規制をしたりして努力をした結果、徐々にではあるが、テムズ川が生き返ってくるのである。

そのような時代の流れを学べる機会が、テムズ・パスを歩く人の目の前に現れるのである。散歩や、テムズ川を見に来るといふ何気ない日常活動の中に、このような機会があるということは、重要なことである。

過去の失敗を忘却の彼方に追いやることがないということが、テムズ川を考える上で大切なことなのである。

3. 歴史のさらなる記述

先に述べた記述が書かれている看板の一番上に、もっと簡略にした文章が書かれている。それは、文章とも言えないほど短いものである。しかし、それをざっと読んだだけでも、大きな歴史の流れが分かるのである。

看板の一番上に書かれているものが次のものである。書かれているものをすべて次に載せてある。これらの短文を読んでいると、新しいものが見えてくるのである。

紀元前約110,000—13,000年、最後の氷河期、ネアンデルタール人がヨーロッパに住んでいる。

紀元前約15,000—12,000年、ラスコーにある洞窟の絵⁴⁾。

紀元前約6000年、以前より乾燥した気候でサハラ砂漠化が始まる。

西暦41年、クラウディウスがローマ皇帝になる。

66—70年 死海文書⁵⁾ がユダヤ人の反乱中に洞窟内に隠される。

約121年 ハドリアヌスの長城⁶⁾ がローマ帝国の国境線としてブリタニアを横切って築かれる。

312年、キリスト教がローマ帝国の公式の宗教となる。

約420年、アンゲル族、サクソン族、ジュート族がイギリスに定住し始める⁷⁾。

525年、イエスの誕生の年を西暦0として使用する年数の表し方の実施が始まる。

テムズ川の看板が教えてくれるもの

750年、写本を彩色した『ケルズの書』⁸⁾ がアイルランドで作られる。

976年、アラビア数字⁹⁾ がヨーロッパで初めて使用される。

1055—65年、ウェストミンスター寺院¹⁰⁾ がロンドンに建設される。

1105年、ヘンリー一世がロンドン旧市街の自治制に勅許の同意をする。

1271年、マルコ・ポーロ¹¹⁾ が中国に向かって出航する。

約1300年、イースター島¹²⁾ への移住者が像を刻み始める。

1434年、ドナテッロ¹³⁾ がダビデの青銅像を鑄造する。

1492年、クリストファー・コロンブス¹⁴⁾ がアメリカを発見する。

1505年、レオナルド・ダ・ビンチ¹⁵⁾ がモナ・リザを描く。

1510年、コペルニクス¹⁶⁾ は、地球が太陽の周りを回っているという説を述べる。

1520—22年、フェルディナンド・マジェランの探検は世界を一周する¹⁷⁾ (しかし265名の船乗りの内15名だけが生還する)。

1558年、エリザベス一世がイングランドの女王となる¹⁸⁾。

1571年、証券取引所がロンドンに設立する。

1580年代、イングリッシュ・セッター¹⁹⁾ をアメリカに導入するという計画が進む。

1585年、エリザベス女王はオランダ王位を断るが、オランダ王国を保護する²⁰⁾。

1599年、グローブ座²¹⁾が開業する。

1600年、ウィリアム・シェークスピア²²⁾が『ハムレット』を書く。

1605年、火薬陰謀事件²³⁾は議会の爆破に失敗する。

1630年、イングランドから（アメリカの）マサチューセッツ州へ多くの移住が始まる。

1634年、タージマハル²⁴⁾が建築される。

1649年、王のチャールズ一世²⁵⁾が処刑され、君主制が廃止される。

1653年、オリバー・クロムウェルがイングランドの護国卿になる²⁶⁾。

1665年、アイザック・ニュートン卿²⁷⁾が万有引力の法則を表す。

1681年、ドードー鳥²⁸⁾がモーリシャス島で絶滅する（最後のドードー鳥は空腹の船乗りたちに食べられる）。

1692年、魔女裁判が（アメリカの）マサチューセッツ州のセーレムで行われる。

1694年、イングランド銀行がロンドンに設立する。

1702年、最初の日刊紙である「デイリー新報」がロンドンで発行される。

1707年、スコットランドとイングランドとウェールズが、グレートブリテンとして一つになる。

テムズ川の看板が教えてくれるもの

1714年、ガブリエル・ファーレンハイト²⁹⁾が水銀柱温度計を発明する。

1721年、ロバート・ウォルポールが英国の初代首相になる。

1755年、フランツ・ハイドン³⁰⁾が彼の最初の弦楽四重奏曲を作曲する。

1776年、アメリカ合衆国連邦議会がアメリカ独立宣言書に署名する³¹⁾。

1778年、タイムズ・ニューズペーパー社がロンドンで創立される。

1781年、天文学者のウィリアム・ハーシェルが惑星の天王星を発見する³²⁾。

1787年、最初の囚人がイングランドからボタニー湾³³⁾へと出港する。

1804年、世界の人口が10億人に達する。

1807年、英国は奴隷売買を廃止する。

1818年、メアリー・シェリー³⁴⁾が『フランケンシュタイン』を出版する。

1840年、ベッドフォードの公爵夫人のアンナが「午後のお茶」の作法を紹介する。

1845—46年、ジャガイモ疫病がアイルランドの飢饉の原因となる。

1851年、アルバート公がロンドンのクリスタル・パレスで大博覧会³⁵⁾を開く。

1859年、チャールズ・ダーウィン³⁶⁾が『種の起源』を出版する。

1863年、ロンドンの地下鉄が開業、蒸気動力を使用している。

1865年、アブラハム・リンカーン³⁷⁾が暗殺される。

1869年、スエズ運河³⁸⁾が開通する。

1876年、アレグザンダー・グレアム・ベル³⁹⁾が電話を発明する。

1906年、無線の遭難信号「SOS」が導入される。

1912年、タイタニック号が沈没する⁴⁰⁾。

1914—18年、第一次世界大戦。

1918年、女性が英国で選挙権を獲得する。

1925年、チャールズ・リンドバークがニューヨークからパリへの単独無着陸飛行をする⁴¹⁾。

1937年、パブロ・ピカソ⁴²⁾が「ゲルニカ」を描く。

1939—45年、第二次世界大戦（概算で5千万人が殺される）。

1953年、ジェームズ・ワトソンとフランシス・クリックがDNAの構造を発見する⁴³⁾。

1969年、人類が月の上を歩く。

1974年、バーコードが導入される。

1990年、ベルリンの壁⁴⁴⁾が崩壊する。

1994年、ワールド・ワイド・ウェブ⁴⁵⁾が創造される。

1999年、世界の人口が60億人に達する（1960年の人口の2倍）。

上に書かれている文章は、すべての英語のスペルが大文字で書かれており、文章は短く、要点だけが述べられている。

ここに書かれているのは、イギリス国内の歴史が多いが、国外で起こった出来事にも言及している。

紀元前では、「ラスコーの絵」はフランスにある。「サハラの砂漠化」のことが記述されているが、これはアフリカのことである。西暦66—70年の死海文章は、ヨルダン西部のクムランで発見されたものである。

「ラスコーの絵」は人類の初期段階の時代のことであり、「サハラの砂漠化」は世界の気候の変動に関係している。キリスト教国であるイギリスとしては、「死海文章」には旧約聖書の最古の写本があるため、非常に重要な出来事であるはずだ。

キリスト教関係で言えば、「キリスト教がローマ帝国の公式の宗教」になったことも、直接的にはイギリス国内の歴史ではないが、重要な歴史の一つであろう。

アメリカに関する言及もある。イタリア人の「コロンブスがアメリカを発見」したり、「マサチューセッツ州へ多くの移住」者があったり、「アメリカ独立宣言書」などは、イギリスと密接な関係がある出来事だが、独立後のアメリカはイギリスと政治的に関係があるとは言え、他の国の出来事である。しかし、そのような記述も載っているのである。例えば、リンカーンの暗殺やリンドバーグの単独無着陸飛行などは、アメリカの歴史の一コマだと言えるものである。

ドイツに関するものとしては「ベルリンの壁」の崩壊が乗っている。

イースター島の石像の事やモナ・リザの事、そしてピカソの事、ドーレー鳥の事やスエズ運河の事など、イギリスと関係が全くないとは言えないが、イギリス国内の事ではないのである。

最近のものでは、月面歩行の出来事や、「世界の人口」数のことも記載されている。

分野も政治問題あり、社会問題あり、音楽や絵画、文学に至るまでの文化ありと幅が広いのである。そしてこれらすべての事は、世界的な規模で考えれば、すべてイギリスとも関係があることなのだ。ここが大切なことなのではないだろうか。

テムズ・パス沿いに設置されている看板に、世界的な観点からの記載があるのである。このような世界の出来事を読む人の思考は、やはり国内だけに限定する

ような思考回路にはならないであろう。テムズ・パスを歩く子供たちが読めば、意識をしなくとも、世界に目を向けるようになりはしないだろうか。

このような記述を読む人は、これから、どのような事を教えられるのであろうか。自分の国の事だけを考えている国民とは明らかに違うはずだ。狭い国内の事だけに限定するのではなく、世界の事も常に考えておかなければならないという考えが生まれるのではないだろうか。自国のことだけではなく、世界を常に考えるという思考が芽生えるのではないだろうか。

特に子供がこのような看板を読むと、知らず知らずの内に世界を考えるようになるだろう。想像の翼は大きく羽を広げ、国内から国外の出来事にも考えを及ぼしていくはずである。

このようなことが、イギリスの外交上手につながっているのかもしれない。

観光地の看板には、地元の観光案内が書かれているのが一般的である。大きく見ても、少し離れた場所の観光案内、それも地元と関係がある場所の観光案内が書かれている看板もある。しかし、歴史の書かれた看板、それも国内だけではなく国外の出来事も含めて、世界規模で記載されている看板というのは、日本にはほとんどないであろう。

そして、この看板には、歴史的記載の最後に、次の言葉が添えられている。

将来の歴史

輸送や隣接地の経済のためのテムズ川の使用は、手が付けられないほど込み入ったつながりになっている。テムズ川健康はそれを取り巻くすべての生き物の健康と絡み合っているのが今は分かる。テムズ川と調和して我々の日々の生活を送ることは、決して我々の挑戦を終わらせることではない。あなたはテムズ川の将来にどんな役割を果たすのだろうか。

この最後の文章が訴えかけていることは、テムズ川に対するイギリス人の取り組みである。別に大きいことをやるように言っているのではなく、自分たちが出来ることから始めればよいというのである。

そして、この最後の言葉の下には、「将来を推測するには過去を学べ」⁴⁶⁾ という、

孔子の言葉が記載されている。これは、「温故知新」で、「故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知る」ということである。今までのテムズ川の歴史を知り、そこから学ぶことが将来のテムズ川を知るのに必要だ、と言っているのである。

この孔子の言葉が最後の最後に載っているという事自体、世界に学ぶという考え方がイギリス人の中にあると言っても過言ではないであろう。

4. むすび

ロンドン地区を流れるテムズ川は、環境汚染で一度は死滅した。そこに生きる生き物が全滅したのである。しかし、イギリス人の努力により、サケが遡上するようになり、今のテムズ川には多くの種が戻ってきているのである。彼らは歴史から学んで、それを活かしており、よりよい生活、よりよい未来を築こうとしている。

テムズ・パス沿いに設置してある看板から、イギリスの歴史を見ることができる。しかし、それはイギリス国内だけに留まらないものである。

歴史の記述は、世界大戦、宇宙探検、郵便番号など、多岐に亘っており、さまざまな出来事が記載されている。このような歴史を読むと、イギリスというのはやはり大国だと思わざるを得ない。イギリス本国の歴史、国外の国々の政治・経済・社会・文化に関する歴史までも言及がなされている。

世界の出来事にも言及していることは、テムズ・パスを歩く人たちの考え方に影響を与えているはずである。子供時代から、そのような考え方にさらされているイギリス人は、思考が国内に限定することなく、常に世界の中のイギリスという考えになるのであろう。それがイギリス外交にも反映され、外交上手と言われる基の一つになっているのかもしれない。

テムズ川が滔滔と流れ、北海に注ぎ、そして世界の海へと広がっていくという事を考えれば、イギリス人の思考も世界の事を常に考え、世界の出来事と繋がっている、という事に納得がいくのである。

以上

（この小論は、法政大学の2007年度在外研究により出来たものである）

注

(看板に書かれている記述は、すべて現在形で書かれている。しかし、この小論では、2の項の記述は過去形で日本語に翻訳し、3の項の記述は現在形そのまま日本語にしてある。それは、2の項はすべての記述を載せていないのと、翻訳と翻訳の間に説明の文を入れてあることで、2と3の時制を区別した。3の項はすべての記述を、そのまま載せてある。それ以外の日本語の説明を入れていない。その為、3の項の分かりづらい箇所には注を入れた。他に意図はない。)

- 1) Environment Agency による History in Motion というタイトルのある看板を参照にした。
- 2) この文章の英語は、The Great Fire of London breaks out. destroying four-fifths of London in four days. となっている。「breaks out」の次の「.」は、明らかに「.」の間違いだろう。
- 3) この文章の英語は、An archaeological survey of the entire Thames foreshore is undertaken for the first time. となっている。「archaeological」は「archaeological」のことであろう。綴り字の間違いは他の看板でも、たまに目にする可能性がある。
- 4) フランスのラスコーにある洞窟で1940年に発見された。後期旧石器時代のもものと推定される動物彩色壁画。
- 5) 死海文書とは、1947年以降、ヨルダン西部、死海北西岸近くのクムラン洞窟などで発見された多数の古文書で、旧約聖書の最古の写本がある。
- 6) ハドリアヌスの長城とは、ローマ皇帝ハドリアヌスがブリタニア（現在のイングランド）北部に築かせた、全長120キロメートルある城壁のこと。
- 7) アングル族は5世紀にデンマークのスレスウィックからブリテン島に移住した西ゲルマン族。サクソン族は、チェコスロバキア西部からドイツを通して北西に流れ、北海に注ぐ1,170キロメートルのエルベ川の河口近くに住んでいたゲルマン民族で、5—6世紀に一部がイングランドに進入して住み着いた。ジュート族は、デンマークとドイツを含むユトランド半島の出身と推定される大陸ゲルマン民族で、5世紀にイギリスに侵入しケント州に定住した。

- 8) 『ケルズの書』とは8世紀にアイルランドのケルズの街で作られた彩飾写本のラテン語福音書。
- 9) アラビア数字は、インドに始まるが、ヨーロッパにはアラビア人によって伝えられたため、このように呼ばれる。
- 10) ウェストミンスター寺院は、ロンドンにあるゴシック調の教会で、国王〔女王〕の戴冠式が行われ、国王、女王、名士の墓がある。
- 11) マルコ・ポーロ（1254—1324）はイタリア北東部のベニス旅行家。
- 12) イースター島はチリ西方の太平洋南部にあるチリ領の孤島で、巨大な像や考古学上の遺物がある。
- 13) ドナテッロ（1386?—1466）はイタリアの彫刻家で、『ダビデ』の大理石像（1408年）と青銅像（1434年）を作製した。
- 14) コロンブス（1446?—1506）はイタリア生まれの航海家で、スペインの援助を受け、1492年アメリカ大陸に到着した。
- 15) レオナルド・ダ・ビンチ（1452—1519）はイタリアの画家・彫刻家・建築家・音楽家・数学者・科学者で、イタリアのルネッサンス期に活躍した。
- 16) コペルニクス（1473—1543）はポーランドの天文学者で、地動説を提唱した。
- 17) フェルディナンド・マジェラン（1480—1521）はポルトガルの航海者で、1520年にマジェラン海峡、21年にフィリピン諸島を発見した。マジェランはフィリピンで亡くなったが、彼の船団の中の一隻が22年にスペインに帰国し、最初の世界周航を成し遂げた。
- 18) エリザベス一世（1533—1603）は、英国国教会を確立し、スペインの無敵艦隊を破った。イングランド女王は1558年から1603年まで。
- 19) イングリッシュ・セッターとはイギリス原産の中形の鳥猟犬。
- 20) スペインからのオランダ独立を支援したイギリスは、スペインの無敵艦隊を破った。
- 21) シェークスピア劇の初演を行った劇場として有名である。
- 22) ウィリアム・シェークスピア（1564—1616）はイギリスの詩人・劇作家で、『ハムレット』（1601）、『リア王』（1606）など38編の戯曲と2編の長詩、ソネットを書いた。『ランダムハウス英和大辞典第2版』（小学館）では『ハ

ムレット』は「1601」となっており、『ケンブリッジ版イギリス文学史 I』(研究社、1976年、p.377)では「1602ころ」となっている。

- 23) 火薬陰謀事件とは、イギリスのカトリック教徒が、強圧的な法律への復讐として、国会開会日(1605年11月5日)に議事堂を爆破し、ジェームズ一世と上下両院議員を殺害しようとした事件。
- 24) タージマハルとは、インドのムガル王朝第五代の王シャー・ジャハーン(1592?—1666)が后を偲んで建てた白大理石の霊廟。
- 25) チャールズ一世(1600—49)は、1625年から49年まで英国王であったが、スコットランド失政から清教徒革命を引き起こし、処刑された。
- 26) オリバー・クロムウェル(1599—1658)はイギリスの将軍・政治家であり、イングランド、スコットランド、アイルランドの護国卿(1653—58)になった。
- 27) アイザック・ニュートン卿(1642—1727)はイギリスの哲学者・数学者・物理学者・天文学者で、万有引力の法則を発見した。
- 28) ドードー鳥は鳩に近縁の鳥で、動作は鈍く飛べない。インド洋上のモーリシャス島やレユニオン島などに生息していたが、17世紀の末ごろに絶滅した。
- 29) ガブリエル・ファーレンハイト(1686—1736)はドイツの物理学者で、温度計のカ氏目盛りを発明。
- 30) フランツ・ハイドン(1732—1809)はオーストリアの作曲家。
- 31) アメリカ独立宣言は、1776年7月4日に、第2回大陸会議が決議した13植民地の英国からの自由・独立の宣言であり、アメリカ独立宣言書は、アメリカがイギリスから独立する理由・理念を内外に示したものである。
- 32) ウィリアム・ハーシェル(1738—1822)はドイツ生まれのイギリスの天文学者で、太陽系の内側から7番目の惑星である天王星を発見した。
- 33) ボタニー湾は、オーストラリア南東海岸沿いの湾で、もと英国の流刑植民地。
- 34) メアリー・シェリー(1797—1851)は英国の小説家。
- 35) 大博覧会とは、1851年ロンドンのハイド・パークのクリスタル・パレス(水晶宮)で開かれた国際的博覧会のこと。
- 36) チャールズ・ダーウィン(1809—82)はイギリスの植物学者で、進化論の

提唱者である。

- 37) アブラハム・リンカーン（1809—65）は第16代アメリカ大統領で、アメリカの国家統一と奴隷解放を達成した。
- 38) スエズ運河は、地中海と紅海を結ぶエジプト北東部の運河である。
- 39) アレグザンダー・グレアム・ベル（1847—1922）はスコットランド生まれのアメリカの科学者である。
- 40) タイタニック号はイギリスの豪華客船で、1912年4月の処女航海中、北大西洋で氷山に衝突後沈没し、1517人が死亡した。
- 41) チャールズ・リンドバーグ（1902—74）はアメリカの飛行家。1927年5月20日にニューヨークを飛び立ち、33時間30分後にパリに到着した。
- 42) パブロ・ピカソ（1881—1973）はスペイン生まれの画家・彫刻家で、フランスで活躍した。
- 43) ジェームズ・ワトソン（1928— ）はアメリカの生物学者で、フランシス・クリック（1916—2004）はイギリスの分子生物学者であり、兩人とも1962年にノーベル生理・医学賞を受賞した。
- 44) ベルリンの壁は、東西ベルリンの間に東ドイツが1961年に構築し、1989年11月に崩壊した。
- 45) ワールド・ワイド・ウェブとは、インターネット上にある、ハイパーテキスト方式でリンクされた情報ネットワークのこと。
- 46) “Study the past if you would divine the future.”— Confucius (c550–478BC) と英語で書かれている。